

知識を知恵に変える方法（その6；最終）

- 【Ⅰ】 差の情報によって意思決定する。
- 【Ⅱ】 価値の方向とキーワードを目に見えるようにする。
- 【Ⅲ】 落ちのない段階的な手順を創り出す。
- 【Ⅳ】 「何を」の対象の構造・構成イメージを創り出す。
- 【Ⅴ】 これを実現するための体制と手順を示す実施計画書を創り出す。

-
- 【Ⅴ】 これを実現するための体制と手順を示す実施計画書を創り出す。

以上シリーズで解説した各種手法を一貫した形で実現すれば、最終目標であるところの「知識を知恵に変える」ことができることになる。それを「顧客のニーズに合致させる」いわゆる「Design to Customer Needs」として捉えることで物創り屋の責務を充分果たすことができることになる。

このDTCNにさらにDTC（Design to Cost）の概念を加えることによって以下の効果が得られる。

- ・ 百家争鳴をおさめることができる。
- ・ 目的の焦点の「それで、何をするか？のキーワード」と、そのイメージを創り出すことができる。
- ・ そこにたどりつくまでの手順を創り出すことができる。
- ・ そして、以上の内容について「目に見える管理」ができるようになる。

すなわちいままで述べた各種手法から創出されるドキュメント系が実施計画書とみなされ、事業展開が論理的で、多くの知識を活かした、いわゆる知恵を結集することができるのである。

そこで再度各手法の要点を列挙して全体を見渡してみよう。

- ① PMD手法
正しい目的と手段の関係を作る。
目的の結果のイメージを表すキーワードをはっきりさせる。
目的の結果を実現させるために、どこから手をつけたらよいかを見つける。
目的に向かって、同じ意思決定をするベクトル合わせをする。
- ② 3-5フェーズ・インプルーブメントの方法
現状からの改善のアプローチパターンを3つないし5つに区分して、バランスの取れた改善と開発を行う。
- ③ ステップリスト・マネージメントの方法
目的の結果を実現するための落ちのない手順あるいはシナリオを創る。
- ④ 実施計画表
上記の手法で抽出した項目や、それ以外の項目を日常業務のなかに上手く取り込み、動きやすくする。

⑤ FBSテクニックとWBS

FBSは対象物件もしくはシステムの最適なアイデア・イメージの構造を示す。
WBSは対象物件もしくはシステムの親子関係とその範囲を示す便利な表現方法である。

日頃の業務において、迷走感や挫折感が極力生じないようにさせるためには、以上述べたようなさまざまな手法を前もって駆使しておくことは決して無駄ではない。

しかも普通に論理的であり、難しい方式ではなく、極めて常識的なアプローチ手法であるので大いに活用してもらいたい。

また「目に見える形」にするという点でも有効である。OA機器の発達する昨今であっても必要な事項は「ボード（板）」に、「ペーパー（紙）」に、「スクリーン」に出力描画して、皆で討議、協議しながら目的の実現に向けて知恵を結集するよう習慣づけよう。

（このシリーズ 完）